

「他者のために、他者とともに」何をするのか —キリスト教人間学的「人間の尊厳」の生き方の一考察—

小林 宏子

日本社会が大震災や福島原発事故の災厄から未だ立ち直れずにいる中で、遷宮の年を迎えた伊勢神宮や出雲大社に何百万人という参拝者があると報道されている。執筆者には、そうした人々の心を動かしているものの内実を知ることにはできないが、日本古来の伝統宗教に近づくことがブーム化することを宗教者の端くれとして歓迎すべきかどうか迷う。もし、こうした宗教ブームが本学の宗教的伝統について考察する好機をもたらすならば、大いに歓迎すべきであろう。しかし、激動する社会の中で自己の内側に抱え込んだ不安に対処できない人々が、集団化の中に安心を見出そうとする現象ならば、歓迎してばかりもいられない。日本の宗教環境の中では少数派に過ぎないキリスト教の言説は、自らの生き方を模索する途上にある若者たちに、価値観の衝突という葛藤をもたらす異物と映る可能性もあるからである。本論考は、カトリック校である本学のアイデンティティを再考するための一考察である。

1. はじめに

40 という数は聖書においては一世代を意味し、奴隷状態のエジプトから脱出を果たした世代が、荒野で神の導きを体験はしても、実際には約束の地であるカナンには入植する前に死を迎えたことから、苦行や試練の期間を表わす数とされる¹。その意味では、本学もこれからの時期こそが、与えられたこの秦野の地において、本格的にそのアイデンティティを生き、本来、神が本学を通して人々に与えようと望まれた恵みを提供できるか否かが問われることになるを考える。聖書を読めば、カナンの地に入植を果たしたイスラエルの民は、絶えず外からはバビロンやエジプトのような強国からの脅威に、内からは土着文化の影響に晒されて、「神の民」の独自性と使命を見失う危機に直面していたことが分かる。

そこで、本稿は、執筆者がこれまでの人間学の授業経験を踏まえ、今後、更に重要性を増すと考える「人間の尊厳」の生き方に関する考察を通して、本学人間学のキリスト教的視点を確認する試みである。第一章では、すでに本学において定着した「他者のために、他者と

1. ミシェル・クリスチャン『聖書のシンボル 50』（オリエンズ宗教研究所、2000）53頁

ともに」生きるというモットーには、前提として、自分自身の尊厳に対する自覚とその根拠となる神の愛の認識が存在していることを論じる。すなわち、本来、キリスト教における隣人愛とは、すべての人間を平等に愛する神の愛と、その神によって愛されている自分自身の価値を理解して初めて可能となる、他者に対する態度であり、行為だからである。

第二章では、「他者のために、他者とともに」生きることは、本来、自己にとっては異質な存在となる人々、すなわち多様な言語、文化、思想的背景を持つ人々との共生を意味することであるから、この非自己なる他者と向き合う土台としての自己を確立する必要があることを論じる。自己保存の本能を持つ生き物としての人間は、無意識のうちに心理的防衛機制を身につけており、自己をふさわしく肯定できる確信がない限り、他者との対話的な関係に自己を開くことは難しいからである。自己肯定感の脆弱性が見られる現代日本の若者に、他者の存在を「同じいのちを分け合った」人として尊敬することを学ばせるためには、一定の心理的成長を経るための時間を要するのである。

従って、本稿の主旨は、本学人間学がキリスト教という宗教的視座を取り入れることで、人間のいのちを神から与えられたものと捉える被造性の受諾といのちへの畏敬に導き、同時に、自己及び他者の有限性と自由意志を尊重するための土台となる地平を開くことを論じることである。「他者のために、他者とともに」何をするのかという問いに対しては、神に造られたままの自己を愛し、その人間性を担う自己と共に、同じ課題を背負って生きている他者を、もう一人の自分として受け入れ、担うことであると答える。そして、それが、自他の尊厳と自由を守って互いに愛し合うことに繋がる「他者のために、他者と共に」生きる人の理想であると論じる。

II. 本論

第一章 非キリスト教国である日本の中でキリスト教人間学を学ぶ意義

1.1. 現代社会の中で自己の立ち位置の基点を自覚するための視点

今さら述べるまでもなく、本学の人間学における「人間の尊厳」の根拠は、キリスト教における人間観が前提にされており、人間が「神の似姿」として創造され、「神の愛を受けているいのち」であるという信仰に置かれる。また、人間がその尊厳にふさわしく生きることができると、神の愛を啓示し、また、その神の愛に応じて生きる人間のモデルとしてイエス・キリストの人生が啓示されているとも信じる。そのため、この信仰に基づくとき、「人間」の尊厳ばかりでなく、人間一人ひとりが、神の目には神の霊を宿す器として「かけがえない（唯一無二の）」価値を持ち、更に、その価値は平等であるという「個人」の尊厳の意識も導き出される。

しかし、本学に入学する学生の多くはキリスト教に馴染みがなく、自分の尊厳の根拠となるこの神の愛を知らない。また、その神を、天照大神や大国主命から殉国の死者までを神として祭る日本文化における「神」と同じ日本語で表すために、西洋キリスト教の God に含まれる唯一絶対の超越的存在としてのイメージを想像できずにいることを自覚しない。更に、物質文明の便利な利器に囲まれた快適な生活に慣れている彼女たちは、人間存在の本質的卑小さや限界に哀しみを覚え、その意義を問う経験も少ないため、人間の尊厳の根拠に、敢えて神という超越的概念を持ち出して論じることの意義も、更に、そこから導き出される自己の尊さを理解することは容易ではない。

むしろ、藤原聖子氏が述べるように、公教育の中でキリスト教を「愛の宗教」と規定して論じれば論じるほど、若者たちはその言説に「胡散臭さ」を感じ、他の分野から入手する情報の中のキリスト教会の汚点に関する暴露話や陰謀説に興味を持ち、キリスト教を否定的に扱う解釈にこそ、「格好よさ」を感じる結果を招くことが多いのであろう²。

一方、イエス・キリストの神が人間を愛する愛し方は、およそ、20歳前後の本学学生が望む「大切にされ、愛されていると実感できる仕方」とは異なる。そのため、彼女たちが彼女たち流の愛され方を求め続けている限り、神によって愛されている事実気づくことは難しい。誰かが、その事実を指摘しない限り、自分が求める愛され方はおそらく他者の自由を考慮しない幻想であり、その幻想を追究することによっては、決して心の成熟という人生を豊かにする課題を達成することも難しいことを理解しないだろう。そこで、自分を愛される側から愛する側に移して行動し、愛することの現実を自覚的に体験するよう促すことが必要である。そうすることで、E・フロムが言う通り「誰かを愛するというのは、単なる激しい感情ではない。それは決意であり、決断であり、約束である³」ことの一部を理解し、誕生から大学生になるまで、継続して養育してきた保護者を始めとする周囲の人々の愛の一面を見直すのである。そして、そこで同時に見出されるのは「愛されてきた自分」であり、「相手の愛を受け取りきれなかった自分」の未熟さでもある。

本学が人間学という科目を通して学生に提供するものは、こうした人間の本質的特徴を見直すための「視点」であり、キリスト教が培ってきた伝統に基づく「考え方」である。もし、学生たちがすでに、自分たちの現状を振り返ると同時に、人間に備えられた可能性としての愛の深さや高さをも理解し、自分自身の進路選択やその先にまで及ぶ人生全体を見渡すための軸となる独自の視点を確立しているのであれば、その軸に照らし合わせて本学の視点と理念を理解するであろう。しかし、未だ、理論としての軸を確立していないのであれば、社会に出る前に、本学が提供する視点と理念を考察の対象として定め、自己の中に、自分の立ち位置を確立するための基礎づくりを始めることには、一定の意義があるはずである。

2. 藤原聖子著『教科書の中の宗教 ―この奇妙な実態―』（岩波新書、2011）52頁

3. エーリッヒ・フロム著／鈴木晶訳『愛すること』（紀伊国屋書店、1991）90頁

1.2. 先端科学技術がもたらす全能感の魅力の中で見失われる人間の尊厳

執筆者の授業は、人間の本質の特徴を様々な角度から考察するためのサンプルとなるような人物の生き方を提示する方法で、学生たちに、人間に与えられている尊厳とその尊厳にふさわしい生き方に関する問題意識を喚起するものである。

ところが、社会の変遷と共に多様な生き方が尊重される時代となり、学生の学力とそれに伴うニーズも多岐に及び、人間の本質的特徴に関する範例の考察が、学生の共感と理解を得にくい現実となった。その背景には、様々な理由が考えられるが、日々、目覚ましい発展を遂げる最先端科学技術の影響は大きいと考える。

わずか20年前後の人生体験しか持たない若者にとっては、人類が遺産として継承してきた人間の本质とその生命の根源に関する複雑な理論よりも、未来に実現可能となる、人間に万能感を与える科学技術の方が、より現実味を帯びた神的存在と映るのであろう。従って、3Dプリンターによって未来には人の臓器作製も夢ではなくなり、臓器移植のために脳死の患者から臓器を摘出する必要もなくなる日が来るだろうと論じられる中で、神が人を創造したなどという伝承を真面目に受け取る信仰を、自分の人生の指針に位置づける選択をする学生に出会うことは珍しい。

まして現在、人々は自分の意識を一つの問題に留めおくことができず、次々と届く新しい情報によって喚起される願望を充足させる技術とモノを、どのようにして所有し目的を達成するかには幸福感と充実感の体験が懸かっていると信じている節がある。そして、決してそのすべてを所有することはできず、実現もし得ない自分に不全感と不満を抱く矛盾に陥っている。更に、人間の有限性があたかも悪であるかのように錯覚し、そのように創った創造主がいよいよものなら、敵意や怒りを覚えて当然であると考える者もいる⁴。

このような状態にある人々には、キリスト教が人間の有限性とは、自分独りで自己完結することなく、無限の神と他者への開きを得させる契機とするために、神が備えた人間の本质であって、人間が自力で乗り越えなければならない障害なのではないと論じても、容易には受け付けない。更に、神にとって一人ひとりが限界を有することは、人間が神の愛の対象であることとは矛盾せず、むしろ、神は一人ひとりの人間と、他者という存在の中で、ありのままに受け入れ合い、支え補い合い、理解し愛し合う関わりを築くことを待ち望んでいることを語っても、それは、ただの夢物語としてしか響かないようである。

4. 自分の思い通りにならないことが一つでもあること、すなわち、人間の自由に限界があるという事実、また、自分がこの世界の中心ではない真実に対して怒りで反応することは、キリスト教ばかりではなく仏教においても、三毒の一つの瞋恚（自分の心に逆らうものをいかりうらむこと）として指摘される人間の本质に刻まれた自己中心性とも言える傾向である。

1.3. キリスト教教育の理想と若者の現実との間にある溝

本学に入学する学生たちの多くは、自分の内面を沈思黙考することの価値を教えられておらず、そこに見出される空虚感や孤独感を自覚する時間も精神的ゆとりも与えられず、更に、その孤独の先の静寂の中に神との出会いを待ち望む祈りに心を集中させることで、「いつでも、どこでも、どんな時にも自己を支え、満たし得る」神を知る恵みを体験する可能性があることも知らず、また、その活動に参加することを励まされることもない。

他方、キリスト教は人間の救いについて、神の第二のペルソナがキリストの人格において人性をとり、その人間性を完成させたと同時に、神性の中に人性を取り入れたことに絶大な恩寵を見出す教えを説く。それは、キリストに結ばれる人は、三位の神のいのちである愛の交わりの中へ招き入れられる希望が与えられたことと、その恵みによって、人間の本質的傾向である自己中心性を脱して隣人愛を生きることが可能となり、神の似姿である人間本来の姿へと成長する道が開かれたことを意味する。

従って、学生たちの現実とこのキリスト教の教えとの間に存在する、これほどまでに大きな溝を意識せずに、説明を試みることは無謀でさえある。しかし、論説と同時に人性に宿る神性に関する教えの片鱗を感じさせる人物が社会の中に存在しさえすれば、若者たちは、その理論の現実的可能性について考える余地を持つのであろう。なぜなら、学生たちは、マザーテレサに代表されるような、通常の人間的限界を超える愛の次元において、神性を宿す人間の尊厳を思い出させる人々には敏感に反応するからである。その感性が捉えたものが、具体的に何を意味し、自分の人生においては、いかなる形をとる可能性があるのかを自覚するには、尚、多くの時間と経験を必要とするにもかかわらず、彼女たちは、確かに、キリスト教の中にある「愛」の真実性に憧れるのである。

しかし、そのような「自己犠牲を伴う献身的な愛の本質」を体現する人々の姿が、彼女たちの視界から消えた後には、すぐに刺激的な映像と音楽を伴った最新情報が押し寄せて彼女たちの意識を異次元へと運び去ってしまうため、心の中に灯された「愛」への憧れは一定の体験にまで育てられることがないまま、卒業を迎えてしまう。何事においても速効性が求められる現代において、本学が目指す愛や奉仕の力を備える人格形成の教育は、いかにして若者の心に実現するのであろうか。

第二章 日本人の精神性とキリスト教的「自己確立」の課題

2.1. 「多様性の尊重」に含まれる自己確立の壁

執筆者の授業では、自己の「生き方」や「在り方」を決める価値の選択について考えるために、社会で尊重される様々な価値について個人的に優先順位をつけた後で、グループとしての順位を決めるために話し合う活動をする。この作業のためには、自分の価値観を裏付ける根拠を説明する力や他人の意見に耳を傾ける力が必要となることは当然であるが、作業の

目的は、意見の衝突を前にした自分がどのような態度で話し合いに臨んでいるのかを自覚することにある。

どこまで自分の意見に固執するか、その正当性は何に根拠づけられているか、或いは、なぜ、他者の意見を受容するのか、また、その理由は何か、に注意を向ける作業は自分の内側に生じている葛藤と向き合い、更に、自己主張する自分の行為選択の基準を自覚する内省力を養う活動である。感情的になることを恥じる学生たちは、自分の感情を自覚することで〈感情的にならずに〉行動できる可能性があることを知らないため、自己の感情と向き合うことができずにいるように見える。

多様な価値が渦巻く社会の中で必要になるのは、他者の主張を理解することだけでなく、他者と向き合う自分自身の中で起こっている感情の揺れや葛藤に気づいている落ち着きである。学生たちが限られた授業時間では、多様な他者の意見をその根拠を含めて理解することに精一杯で、更に、多様な意見を調整した上で、グループとしての合意形成にまで到れないとしても仕方がない。しかし、近年、作業を終えた学生の感想で気になるのは、「価値観は人それぞれでいいと思う」という合意形成に至れなかったことの原因の増加である。この言葉を聞く度に、執筆者は、多様性の尊重という教育的標語が、学生たちに表面上の他者受容を、自己防衛のための隠れ蓑として用いるよう機能してしまっているのではないかと懸念する。

「他者のために、他者と共に」生きる人に不可欠な他者受容とは、まず、自己の内面の葛藤を含めた自己受容と同時並行で行われることを前提とする。そうでない場合、誰もがすでに心理的自己防衛機制として習得した、その人特有の抑圧パターンのフィルターを通して他者と関わるために、深いレベルでの受容は起こらない可能性を残すからである。

他者との出会いは多様性を知る楽しさの時期を過ぎれば、必ず実生活上の利己と利他の衝突を経験することになる。しかし、その衝突は自己のあり方に気づくチャンスであり、他者に対する固定観念や偏見から自由ではありえない自己を吟味する内省力を身につける好機でもある。本学の人間学が目指す人格形成には、この自己防衛の対立的姿勢を捨てて、他者へ開く共生的姿勢への転換とその涵養が含まれている。対面式コミュニケーションがもたらすストレスに対する耐性が弱くなっていると言われる学生たちは、自分とは異質の価値を持つ人々との共生に困難さを察知した段階で、早々と対話そのものから撤退してしまう可能性がある。

従って、自戒を込めて述べることであるが、コミュニケーション能力の習得には、本学の基礎ゼミの授業を通して行っている言語力強化というスキルアップと同時に、日本特有の「長いものには巻かれる」と勧める風潮や「出る釘は打たれる」と脅して、「日和見主義」や「事無かれ主義」を自己の安寧維持の手段にしている精神性と対峙する教育を必要とすると考えられる。そのためにも、西洋式「自己の確立」をモデルにした人間性の涵養を目指す本学人間学教育の伝統は保持する意義があると考えられる。確かに、この理念と現実の学生たちとの間の溝

は拡大する一方であるが、今後も個別化する学生の多様性を尊重しつつ、自己理解から自己受容へ、そして、自己確立へと進む一人ひとりのプロセスに同伴する教育を続けたい。

2.2. 代替え可能な役割に貶める社会的圧力の中でのアイデンティティ喪失

3. 11の福島原子力発電所の事故以降、世界は人型ロボット（ヒューマノイド）開発競争を激化させている⁵。日本では、ホンダ技研工業のASIMOや高橋智隆・東京大特任准教授が開発したロボット宇宙飛行士キロボ以外にも、すでに工場の生産ラインの中で働く人型産業用ロボットが存在する。将来的には介護の現場で働くロボットは身近な存在となるであろうし、現在人間が行っている労働の多くはロボットによって〈代替え可能〉となるであろう。すでに、派遣労働という形態の蔓延によって、若者たちは人間を固有な価値を有する人格存在としてではなく、代替え可能な労働力として観る見方を刷り込まれつつあり、そのような価値観に抵抗しない精神性を身につけてしまっていると言える。

また現代は、親の好みの遺伝子を選別して誕生させるデザイナーベビー出産が広がる危険性を、人間の願望を満たす可能性の拡大として歓迎する人々が存在する時代でもある⁶。子を持つ権利や個人の自由の名の下で実施される生殖補助医療分野におけるヒト受精卵による実験と技術開発競争は、子どもを「授かるいのち」から「作り出して所有するもの」に変えてしまった。こうした願望実現のための技術が神のように崇められる社会の中であって、無意識のうちに自分自身を〈親の願望実現の道具〉と錯覚し、その望み通りの姿になれない自分に絶望する学生の姿が目につくようになった。更に、そのような学生が思い込んでいる親の主張には、それまでの子育てのために努力と苦勞を重ねて来た親には、苦勞の実りを手にしたいという自己の願望を娘の進路選択の中に投影し、その実現の責任を娘に押しつける権利があると錯覚しているのではないと思われる内容まである。そして、執筆者にとって、更に深刻な問題と映るのは、学生自身がその親の要求を不当なものだと判断できないばかりか、親の不満の原因が自分の能力の限界にあると考え、その不全感を罪悪感として抱え込んでいる点である。

親子関係の領域にまで侵入してきた功利主義的な強者の論理は、本来の人間観を知らない若者たちの自己概念を大きく歪める圧力となっている。また、このような社会風潮に抵抗する術を持たない弱者は、自由意志を備えた個人の尊厳や、その意志に基づく自由な選択を重ねることで築かれるべき自分に固有の人生への歩みを実現できずに、苦しみ、絶望し、死を選ぶことさえあるのである。自己実現と願望実現を混同した強い立場の人々は、自分の願望実現を科学技術やモノによって果たそうとするだけでなく、他の人を道具として使ってまで

5. 2013年6月27日朝日新聞「僕、宇宙飛行士のキロボ。若田さんのお手伝いに行くんだ」

<http://www.nhk.or.jp/special/detail/2013/03/17/> NHKスペシャル「ロボット革命 人間を越えられるか」

6. 2013年10月20日朝日新聞「デザイナーベビー？」

自己の願望実現に固執している事実に気付かないのである。

光延一郎氏は、すべての願望を実現しようと奔走する人々が競争を繰り広げる先進国に広がる精神的貧困の構造的悪循環を次のように説明する⁷。

「すなわち、彼はできればすべてを掌握して、自分のための完全な環境をつくろうとします（完全主義）。しかし失敗への恐れから、自他を強制してものごとを握りしめます（コントロール）が、不安ゆえに自分自身に正直であることができず、他者に対して仮面をかぶります（不誠実・ごまかし・嘘）。自分と他者の現実の痛み・苦しみを直視できないので、不正にも目をつぶります（抑圧）。自分への評価が低いので、『頼り合い』はあっても人間同士の創造的な相互協力が起こりません（依存）。」

本来、自立した者同士の愛の関係を生きるべく創られている人間には、このような共依存関係では満たされない空虚感が意識されるため、そこから種々の中毒（アディクション）が起こり、結局は自由意志の自律性が奪われた状態に陥ってしまう。執筆者が人格形成の目標として愛する能力の涵養を掲げるのは、その目標こそが、人間に本来備わった自由を獲得し実現する道であると確信しているからである。

2.3. 自己確立という意識が未成熟な日本人

執筆者の授業ではこれまで、人間の特質を、霊的存在としての天使や本能的に行動する動物と対比させながら語ってきた。しかし、近年は、人間によってプログラムされたロボットでも動物でもなく、理性、感情、意志、霊性を統合しながら一人の人間として個を確立し、代替え不能な一回限りの固有の人生を、本人の自由意志の行使に基づいて築いていく存在であることを強調している。なぜなら、人間が他人の好みによって製造されたり、取り替え可能な部品の集合体のように、機能や役割を果たすための存在に貶められる危険が増していると危惧するからである。

現代の人々は、戦争の世紀と言われた 20 世紀に経験した大量破壊兵器の威力と、その後の民族紛争に見られた残虐性、21 世紀に入った直後の 9. 11 や繰り返されるテロの脅威、また、3. 11 に代表される自然災害の猛威、更に、IT 化の中でグローバルに展開する匿名・無形の強者支配の不気味さなどの影響下にある。そしてこの影響は、その恐怖の体験の直接間接に関わらず、多くの人々に人間であることの無力感を意識せずに済むものを選ばせる力として働いている。大きなトラウマを抱えた人々が、その原因となる体験に意識が及びそうになる段階で、前もって拒絶反応を示すように現代人は上記のような個人の手には負えない

7. 光延一郎『神学的人間論入門 神の恵みと人間のまこと』（教友社、2010）82 - 83 頁。マシュー・フォックスによる「創造中心の霊性」を回復するための理論を解説する文脈の中で論じている。

状況を前に、思考を停止させ強いストレスを回避する習慣を身につけているかのようである。

文化人類学者の上田紀行氏は、震災後からの復興を目指す時期に登場した「がんばろう」「日本は強い国」「みんな一つになろう」などのメッセージが、日本人が抱える自我の不安を軽減、又は解消する装置として使われていることを危惧する⁸。メッセージ自体が問題なのではない。ただ、今のタイミングでそれらを連呼し、そこへ逃げ込むべきものとして提示されることで、人々を内面の葛藤から解放するものになると同時に、人々を判断停止状態に追い込むだけの解決法となるというのである⁹。

そして、震災後の「不安」をマネッジするためには、不安はただ無くせばよいのではないと訴える。そして、不安解消のために判断を停止してしまえば、より大きな悲劇をもたらす危険があることに気付くべきであり、むしろ、不安が開く世界の奥行きに目覚め、そこから人生の問い直しを始めるべきであると勧めている¹⁰。

更に、天災と人災を区別し、人災の原因と責任は徹底して追求する姿勢を確立する必要があることも指摘する¹¹。なぜなら、執筆者にとっても耳の痛い指摘であるが、元来日本人は、与えられた状況に順応することは得意ではあっても、状況そのものが正しいか否かを判断し、更に、およそ自分の手には負えないと思われる事態に働きかけて、新しい状況を作り出すことは苦手だからである¹²。この精神的態度の特徴は、先の大戦に突入する際の決定責任を有していた人々の言動においてすでに、〈既成事実への屈服と役割への逃避〉という表現で指摘されている¹³。その弱点が、今また、同様の態度として、福島原子力発電所の事故対応にまつわる東京電力や国の原子力行政関係者の責任の取り方に見られるというのである¹⁴。それは、自分で判断せず、あたかも「『状況は私がいる前から出来上がっていて、私はその中で与えられた役割をこなしているだけである。なぜ、わたしがこの状況の責任をとらなければならないのか?』という、「この事故をもたらした『加害者』サイドであるにもかかわらず、その人達が自分自身を『被害者』であるかのように認知している」無責任な態度に表れているというのである¹⁵。更に、このメンタリティーの背後には、現実を、未来のために自分の主体的働きにおいて形成すべきものとは考えず、どこからか起こって来たものと考え、「過去から流れて来た盲目的な必然性として捉える」日本の精神性の問題が流れていると指摘する¹⁶。

このような、現状を「おのずから起こる必然」として受けとめる日本の感受性は、竹内整

8. 上田紀行『慈悲の怒り 震災後を生きる心のマネジメント』（朝日新聞出版、2011）28頁

9. 同上、28頁

10. 同上、124頁

11. 同上、43－44頁

12. 同上、67－68頁

13. 同上、82－87頁

14. 同上、86頁

15. 同上、86－87頁

16. 同上、83頁

一氏が論じる、日本人の倫理感情としての「かなしみ」や宗教感情としての「悲」の生き方にも通じる特徴と言えよう¹⁷。ただし、日本の精神性における受動性には、本来、自然の営みを前にした人間の有限性・無力性を感じ取る「かなしみ」と、共にその限界性を生きる同胞への共感という「かなしみ」があり、更にそこから「天地悠々の哀感」を感じ取り、この超越的な存在の「哀感」の中に、ある「約束」を見い出し、その「約束」の中に自らを委ねることで、この世の悲惨を生き抜く積極的気概のようなものを含んでいたはずである¹⁸。

しかし、社会から超越的存在に対する畏敬の念が消え去ったように見える現在は、従来、日本の精神が理解していた一般的無常感から宗教的悟りとしての無常観への飛躍と深化の視点が失われてしまったため、本来、この世の常として受容できていた不条理に向き合えず、役割や機能への逃避という形で生き方に陥っているのであろう。その原因の一つは、倫理的教育がその宗教的根拠を失い、単なる処世術のための道徳教育となってしまっているからではないのだろうか。

もし、独自の建学の精神を掲げることが許されている私学にまでも、教育の場には信仰や宗教思想を持ち込むべきではないと考える人々がいるとすれば残念なことであると考えられる。震災を契機として、敗戦後の社会のあり方全体を見直し、今後の復興と再建を図る今こそ、本学が継承してきた人格教育の伝統を生かすべきではないだろうか。その場合、神が愛しその独り子が傷つくことを厭わずに担おうとした人間性を再評価し、その人間観に基づく「人間の尊厳」の生き方を明示することは意味があると考えられる。

2.4. 人間の被造性と有限性を担うイエス・キリストの人間観

「イエス・キリストは真の神であり、真の人である」という教義宣言までに400年以上もの考察の時間を費やすキリスト教の伝統は、ユダヤ教から受け継ぐ唯一神信仰に基づき、神性と人性との間には、人間の側からは決して超えることができない絶対的な隔絶や超越があることを前提にしている。従って、日本のように先祖や死者の霊がいつかは神となると信じられるような連続性は冒瀆できえある。そのためにこそ、キリストが人間イエスとして時空の限界の中に生まれ、人間にまつわる種々の困難と苦勞を味わい、十字架上で生身の身体をもって傷つき、断末魔の苦しみを味わって死んだ事実は、当時の敬虔なユダヤ教徒を躓かせ、キリスト教を迫害させたのである。

しかし、キリスト教信仰は、正にこのイエスの受難と十字架死こそが、神にはその必要はなかったにもかかわらず、わざわざ人間の被造性と有限性を共に担い、弱さと限界に苦しむ人間の傍らに留まるために起こした救い主キリストの啓示であると信じる。神は、神に背を

17. 竹内整一『「かなしみ」の哲学 日本精神史の源をさぐる』（NHK ブックス、2010）

及び、竹内整一『日本人の自然観と神仏』『キリスト教と日本の深層』（オリエンツ宗教研究所、2012）31 - 51 頁

18. 竹内整一『「かなしみ」の哲学 日本精神史の源をさぐる』、109 頁

向け、神なしにその被造性の限界を超越しよう試みる人間の営みが、逆に、この世に敵意や憎しみ、暴力や争い、軽蔑や虐待という苦しみをもたらす原因となっていることを憐れみ、その苦しみと喘ぎを共に担う神の子を与えたのである。

今や人間は、限界を持つ被造物であることに由来するあらゆる苦しみを、キリストと共に担うことが可能となった。そのためこそ、神自身のためではなく「人間のために、しかも、人間と共に」その人間性を担う神の愛に倣って生きることが、キリスト者の生き方の理想となるのである。

従って「他者のために、他者ととともに」生きる人が備える資質は、人間本性に刻まれた被造性と有限性をキリストと共に担い、たとえその人生に身体的、心理的、社会的苦しみがあるとしても、キリストの内に再生される新しい地平を信じて、自己の死を恐れる防衛機制を脱して現実と向き合う姿勢を持つことである。もちろん、「言うは易く行うは難し」の言葉通り、この理念を語る教員がマザーテレサのように生き方で示せるほどの人格者であればよいが、執筆者自身にもその道のりは遠く感じられる。まして、上記のとおり、現代は若者言語との間のギャップも大きく「言うに易く」はない実情もある。それでも、「人間のために、人間と共に」その人間性を担っている神の子の存在とその生き方を伝えることは、カトリック校である本学に託された使命である¹⁹。

「神の目を通して人間一人ひとりが持つかけがえのなさを尊び、神の心をもって人間の被造性と有限性を受け止め、神の手をもって互いに補い合い奉仕し合う愛」を生きることは祈りなしには成しえない事業である。しかし、信じて祈れば実現可能であることをマザーテレサは証している。そして、そのマザーテレサが目指したことは、実は、キリスト教の宣教ではない。ただ、神の愛を伝えることである。マザーは神の愛を知ること、ヒンズー教徒はよりヒンズー教徒らしく、イスラム教徒はよりイスラム教徒らしくなればよいと言う²⁰。それは、真に宗教の真髄にまで至れば、同じいのちを分け合った同胞のいのちを傷つけ、自由や平等の権利を犯そうなどという思いは抱かないはずであるという確信があるからであろう。

III. 結論

多様な価値観を持つ人々が共生する社会を目指すとき、他者を排除せずに自己の尊厳を保つ生き方が選択できるためには、人間一人ひとりが自己のいのちの尊厳を確信していることが必要である。その確信があつてこそ、他者のいのちにも同質の価値があることを認めるこ

19. 柏木哲夫「悲嘆の理解」キリスト教学校教育懇談会編『キリスト教学校が東日本大震災から学ぶこと』（ドン・ボスコ社、2013）43－47頁参照。柏木氏は、キリスト教学校の使命として、人間には背負いきれない苦しみと痛みを、共に〈背負う神〉の存在を知らせることが大切であると語る。

20. ルシнда・ヴァーディ編／猪熊弘子訳『マザー・テレサ語る』早川書房、1997年、37頁

とができるのであり、自己に固執せずとも他者を尊重し、共に個々のいのちのかけがえのなさを受け入れながら、協力することができるのである。

キリスト教の場合には、その信念の根拠には、神を「父」と呼ぶ親しいかかわりを生きる信仰がある。また、その信仰によって、一人の父に対する「私たち」は皆、「兄弟姉妹」のかかわりを生きる存在になることが前提にされている。

従って、「他者のために、他者と共に」生きる人となるためには、神との関係において、人間の有限性や無力性の自覚と受諾、また、その人間をはるかに超越する神的存在との結びのゆえに、同時に生起する他者の存在確認の姿勢が求められるのである。「他者のために、他者とともに」何をするか。それは、キリスト教に土台を置く本学においては、被造性と有限性を担う人間性を積極的に受容して生き、同時に、同じ課題を背負って生きている他者を、もう一人の自分として愛する〈隣人愛〉を実践する人を育てることである。

参考文献

- 上田紀行『かけがえのない人間』講談社現代新書、2008
上田紀行『慈悲の怒り 震災後を生きる心のマネージメント』朝日新聞出版、2011
柏木哲夫「悲嘆の理解」キリスト教学校教育懇談会編『キリスト教学校が東日本大震災から学ぶこと』ドン・ボスコ社、2013
栗原彬「21世紀の『やさしさのゆくえ』』『若者の現在「政治」』日本図書センター、2011
竹内整一『「かなしみ」の哲学 日本精神史の源をさぐる』NHKブックス、2010
竹内整一「日本人の自然観と神仏」加藤信朗監修 鶴岡賀雄・桑原直己・田畑邦治編『キリスト教と日本の深層』オリエンズ宗教研究所、2012
藤原聖子『教科書の中の宗教 この奇妙な実態』岩波新書、2011
ミシェル・クリスチャン『聖書のシンボル 50』オリエンズ宗教研究所、2000
光延一郎『神学的人間論入門 神の恵みと人間のまこと』教友社、2010
ルシンダ・ヴァーディ編／猪熊弘子訳『マザー・テレサ語る』早川書房、1997

参考サイト他

- 2013年6月27日朝日新聞「僕、宇宙飛行士のキロボ。若田さんのお手伝いに行くんだ」
2013年10月20日朝日新聞「デザイナーベイビー？」
NHKスペシャル『ロボット革命 人間を越えられるか』
<http://www.nhk.or.jp/special/detail/2013/03/17/>